

# 不登校小中は最多2万1536人

## 21年度都内公立校 高校も増加傾向

文部科学省の調査で2021年度に急増したことがわかった不登校の小中学生。都内の公立小中学校でも計2万1536人に上り、都道府県別の公表を始めた08年度以降で過去最多となった。都教育委員会は新型コロナウイルスの感染拡大で生活リズムが乱れるなどし、増えたとみる。

データは文科省が全国の学校を対象に一律で行った「問題行動・不登校調査」について、都内分を都教委などがまとめた。都内では、公立と私立の小中学校と

中学校、高校、特別支援学校の計2637校がとりまとめた対象となった。

都教委によると、年度中に30日以上登校しなかった子どものうち、心理的・情緒的要因などで登校できなかった場合、「不登校」とみなされる。



公立についてみると、小中学校では7939人(前年度比1622人増)、中学校では1万3597人(同2226人増)が不登校だった。年々増える傾向にあり、08年度と比べると小学校で4・3倍、中学校で1・9倍になった。

不登校の子どものうち、

学校の指導の結果、以前よりも登校の頻度が高まった子の割合を示す「学校復帰率」は小学校で26・7%、中学校で22・6%。08年度より小学校は2・1割、中学校で3・5割下がった。

不登校の要因(選択式の複数回答)で、最多は「無気力・不安」。小中学生ともに全体の6割に上った。小学

生では「親子の関わり方」と「生活リズムの乱れ、あそび、非行」が続いた。中学生では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」「学業の不振」が多かった。

一方、都立高校での不登校は全日制で994人(同95人増)、定時制で1799人(同100人増)。小中学校と同じく増加傾向だった。

都教委の担当者は「新型コロナウイルスの影響で、漠然とした不安を感じたり学級閉鎖などで生活リズムが乱れたりして学校に行く機会が減り、不登校が増えている」と分析。不登校の背景が多様化、複雑化し、対策が難しくなっていると述べている。

## いじめ認知5万9835件

また公立の小中学校、中学校、高校、特別支援学校が21年度に把握したいじめの件数は、計5万9835件(同1万7297件増)。

コロナで臨時休校や分散登校期間もあった20年度は減少していた。

比較可能な13年度以降、2番目に多かった。認知件数は15年度以降、増加の一途をたどっていたが、新型コロナ

都教委は再び増加した理由について、「コロナによる休校が減り、各学校で子ども同士の関わり合いが戻ったため」と説明している。(本多由佳)